**一　はじめに**

**特集テーマ「復活」**

**熊野詣における「いのちの復活」　山本修司**

修験道の聖地である熊野は一度死を迎え、その後、新たに生まれ変わり、命の復活を願う、すなわち黄泉（よみ）がえりを目指す地である。

熊野詣は十二世紀、院政期のころが最も盛んであった。京都から熊野にいたる熊野街道は参詣者が多く、蟻の行列に似ているということで「蟻の熊野詣」ともいわれた。「天皇は伊勢に行幸」され、「上皇は熊野三山に御幸（ごこう）」されたのである。上皇は天皇とは別格の治天の君なので、様々な制約のある伊勢の神でなく熊野の神に御幸すべきであると勧めたのは園城寺（三井寺）であった。

熊野詣は宇多法皇から始まったが、熊野御幸は白河上皇以降の院政期に本格化し、約二百年間で九十八回も行われた。一度の御幸に同行者が二千五百人に達したこともあった。本稿では「命の復活」を願う熊野信仰を概説し、自らの身を犠牲にすることによって人々を救うという代受苦の実践や、御伽草子や説経節の題材となった「命の復活物語」を紹介する。

**二　熊野信仰とは**

「山川草木悉皆（しっかい）成仏」の心すなわち「自然信仰」である。また、「貴賤を問わず、男女を問わず、信不信を選ばず、浄不浄を嫌わずあらゆる人を受け入れる」などを旨とし、「阿弥陀浄土の入り口」「補陀落浄土の出発地」「観音信仰の聖地」なのである。熊野は、詣でることで往生できる場所であり、死の國・黄泉の国であり、「生と死」の地なのである。「熊」は「隈」であり「死者の魂の籠るところ」であり、「隠れ、籠るところ」である。死は一時的に隠れることであり、将来、「生」に変貌（復活）すると考えられていた。「疑似の死」を体験することが熊野信仰の柱である。

「擬死再生」とはこれまでの自分を葬って新しく生まれ変わり、新たな力を身につけ、その力によって人々を救済すると考えられていた。死の先が生につながり、生はやがて死につながる。したがって熊野詣の浄衣は死装束である。自然信仰、神道、仏教、修験道の聖地なのである。

**三　大峰奧駈修行（擬死再生）**

修験道の神髄は、一度死んで山岳という母胎に入り、修行を経て成仏し、新たな生を得てよみがえる**「擬死再生」**と、山中で得た力を里で生かし、神仏と衆生（大衆）の間に立って衆生の苦しみを受ける**「代受苦」**である。古代〜中世には、しばしば死に至る荒行も実行され、投身や首つりなどの捨身（しゃしん）行も多かったという。

大峯奥駈道は吉野山を北の起終点とし、熊野までの約百七十Ｋｍの間、標高二千ｍ近い山々の尾根を歩く修験道の中でも最も厳しい修行の場である。この行は奥駈修行と呼ばれ、幾日もの間、崖や谷を渡って歩くのである。そして、吉野側を金剛界、熊野側を胎臓界に見立て、その場所を巡拝しながら即身成仏し、生まれ変わるという、擬死再生の修行を行う場所とされ、この道は約千年の歴史を超えて引き継がれたのである。

**四　補陀洛渡海（代受苦）**

はるか南海の孤島にあると信じられている観音浄土、補陀洛（チベット・ラサの「ポタラ宮」を意味するポータラカ由来）に対する信仰である。

熊野は「山の國」でもあるし、「海の國」でもある。那智は補陀落浄土の東門。ここから（通称・棺桶舟に乗って）補陀洛渡海をめざす僧が九世紀末以降跡を絶たず、平安時代～江戸時代までに二十数名に及んだ（全国では百名前後とも）。一種の捨身行であり、那智の補陀落山寺はその拠点であった。この補陀落山寺の住職は六十歳で住職を辞め、翌年の秋に補陀落渡海をすることになっていたが、十六世紀半ばの金光坊（こんこぶ）の捨身以降は生きたままでの渡海はあまりにも残酷であるとの反省もあり、以降は一種の水葬の行事へと変化した。

補陀落渡海の場所は他に室戸岬や薩摩など各地にあったようである。渡海は究極の苦行であり、渡海僧の霊魂は入水捨身の功徳によって、補陀落浄土で永遠の生命が得られるとされた。そして自らの身を犠牲にすることによって人々を救うという代受苦の実践なのである。

**五　火生三昧（代受苦）**

那智の妙法山阿弥陀寺に火生三昧跡がある。境内の掲示文を以下に記す。『平安時代、法華経の行者であった応照上人は、その経の一節にある、すべての衆生の罪を一身にかぶり火をもってみずからの体を焼き尽くすという薬王の姿に心を打たれ、食物を断ち松の葉、草の根を食べて苦行を重ね、自らも紙の衣を着て火生三昧の行を実践しました。上人の身体が火に包まれても読経の声は最後まで穏やかで、辺りにはまばゆいほどの光と鳥たちの讃嘆の声が満ち溢れ、その煙は三日三晩熊野灘を漂い続けたと言われています。これは平安時代末の本朝法華験記という書物に記されていて、現代の価値観では計り知れない壮絶な上人の衆生済度への想いが込められています』。　応照は日本最初の焼身者とされている。

**六　熊野の本地（御伽草子）**

室町時代に作られたと思われる、短編の絵入り物語の御伽草子であり、十五世紀には成立していたようである。熊野三所権現の神仏の由来物語で熊野の修験山伏や熊野比丘尼（びくに）が管理し伝播させた。

天竺（インド）の王様と亡くなった妃と王子が熊野三山の主として熊野で復活するのである。父王は本宮、母后は新宮、王子は那智の主である。お付きの僧や家来たちもそれぞれが神になり、〇〇王子となった。さらなる詳細は紙面の関係もあり省略する。

**七　小栗判官と照手姫（説経節）**

　日本独自文学の一つに説経節がある。仏教のありがたさを物語形式で解き明かそうとしたものである。

二条大納言の放蕩息子・小栗は洛北の深泥池（みどろがいけ）の大蛇の化身と交わったことが咎となり、常陸国に流罪とされた後、判官となった。

やがて武蔵と相模の郡代を勤める横山氏の娘、照手姫と恋仲になり、夫婦となるが、横山氏はこれを認めず、結局、小栗は横山氏に毒殺されてしまう。一方の照手姫は相模川に投げ込まれるが救われ、美濃の青墓の遊女屋の下働きとなる。

小栗は冥途での閻魔大王の審判結果により、『この者を熊野本宮の湯の峰に入れて治療させてほしい』と書いた札を胸につけられて、藤沢の上人（遊行寺の住職）にあててこの世に送り戻された。上人は小栗に「餓鬼阿弥陀仏」の名をつけてやり『この者をひと引き引いたは、千僧供養、二引き引いたは、万僧供養』。土車に小栗を乗せ、道端の者は先を争って綱を引き、湯の峰をめざす。途中、照手姫も小栗の変わり果てた姿と知らずに引いた。遂に湯の峰に到着。『一七日、御入りあれば、両眼があき、二七日、御入りあれば、耳が聞こえ、三七日、御入りあれば、はやものを御申しあるが、以上、七七日と申すには、六尺二分、豊かなる。元の小栗殿とおなりある』小栗の完全復活である！　その後小栗は照手姫と無事再会し、幸せに暮らした。

「小栗判官」は、昭和五十七年（１９８２）、横浜ボートシアターの仮面劇（遠藤啄郎脚本・演出）や平成三年（１９９１）のスーパー歌舞伎（梅原猛作）が話題となった。また、藤沢の遊行寺にはなんと、小栗判官と照手姫の墓がある。さらに家康の孫で越前藩主松平忠直（１５９５～１６５０）が注文主とされている岩佐又兵衛風絵巻の「をぐり」は全長三百二十四メートルに及び、宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている。

　　　　　　　　　（完）

〔主な参考文献〕

・補陀落渡海記　井上靖　講談社

　文芸文庫

・中世小説集　梅原猛　新潮文庫

・熊野三山・七つの謎　高野澄　祥伝社黄金文庫

・ミラクル絵巻で楽しむ「小栗判官と照手姫」太田彩　東京美術

・岩佐又兵衛風絵巻の謎を解く

　黒田日出夫　角川選書